

原卵スケコの供給動向(推定) (単位=ト)

	2011年(H23)	2012年(H24)	2013年(H25)	2014年(H26)	2015年予想(H27)
期首在庫	31,200	29,700	33,200	34,500	35,500
国内					
近海・沖合	4,500	4,000	3,700	3,300	3,000
北極自船びき	0	150	150	100	若干
小計	4,500	4,150	3,850	3,400	3,000
米国	14,520	15,380	13,530	19,840	18,440
ロシア	23,770	25,190	21,020	24,960	21,960
韓国	0	0	0	0	0
冷凍	0	0	0	0	0
塩蔵	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	0
ベトナム・タイ国	0	0	0	0	0
中国	0	3	0	0	10
冷凍	0	0	0	0	0
塩蔵	1,570	1,460	1,430	1,280	1,320
計	1,570	1,463	1,430	1,280	1,330
輸入計	39,860	42,030	35,980	46,080	41,730
新物合計	44,360	46,180	39,830	49,480	44,730
国内総供給量	75,560	74,880	73,030	83,980	80,230

カズノコの供給動向(推定) (単位=ト)

	2012年(H24)	2013年(H25)	2014年(H26)	2015年(H27)
原卵輸入				
カナダ	1,720	2,310	2,220	2,200
米	1,630	1,470	1,920	1,150
韓国	0	0	0	0
中国	120	50	110	70
ベトナム・タイ国	0	0	0	0
ロシア	650	540	480	520
計	4,120	4,370	4,730	3,940
国内処理				
前浜	80	80	50	60
北米	2,100	2,300	2,500	1,900
ロシア	50	70	100	140
計	2,230	2,450	2,650	2,100
小計	6,350	6,820	7,380	6,040
カナダイスト				
冷凍	2,050	1,970	1,680	1,570
塩蔵	650	640	460	370
オランダ	0	0	40	10
計	650	640	500	380
原卵輸入				
アイルランド	0	0	0	0
塩蔵	670	610	800	760
冷凍	510	590	460	490
計	1,180	1,200	1,260	1,250
その他	1,320	1,250	1,260	1,130
塩蔵	510	590	500	500
冷凍	810	660	760	630
計	1,330	1,240	1,260	1,130
国内処理				
小計	3,980	3,970	3,560	3,330
新物合計	10,330	10,790	10,940	9,370
太平洋系(うちロシア)	2,500	2,000	3,000	2,000
イーストほか	(0)	(100)	(0)	(0)
小計	2,600	2,300	3,300	2,400
期首在庫				
小計	2,600	2,300	3,300	2,400
総供給量	12,930	13,090	14,240	11,770

調製品の輸入動向

輸入調製品	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
主に明太子					
韓国	2,140	2,220	1,650	1,620	860
中国	5,440	5,500	4,840	4,720	4,200
タイ国	50	40	15	220	190
ベトナム	0	40	0	280	750
北朝鮮	0	0	0	0	0
その他	若干	0	0	2	1
合計	7,630	7,800	6,500	6,840	6,000

サンマ

大不漁の前年下回る恐れ

今年のサンマ漁獲量は約40年ぶりの低水準となった前年を下回る懸念が強まった。主漁場の道東三陸沖の海水温が高く、日本近海への来遊量が少なくなる見通し。漁模様は出足が低調で中旬以降も漁獲変動が大きくなる見込みだ。脂ののり具合は痩せた魚が目立った前年より改善されると予測している。

水産研究・教育機構は7月29日、8、9月の北海道東方・常磐沖の漁海況予報をまとめた。来遊する可能性がある資源量は前年比10・5%減の121万9000トと推定。東京管内で同日開いた会合で、同機構の担当者「(漁獲量が)大不漁だ」と指摘した。

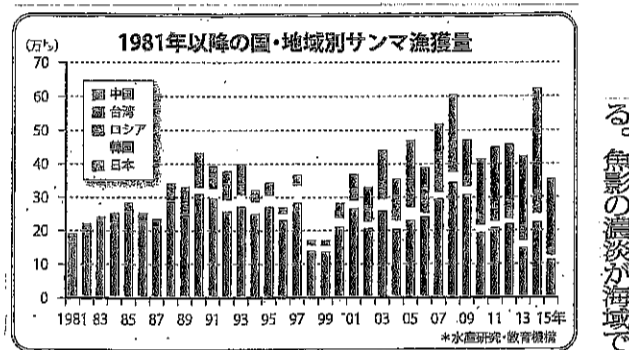
漁況は今年20日に10ト以上の大型獲り網船の出漁後、低水準で推移する見通し。漁場は折尾島沖以北の広い海域に分散する。9月中旬に漁獲量は向上が、以降の旬別漁獲量は変動が大きいと予測している。

高水温で来遊減、漁場遠く

船の出漁回数が限られ、良い時期と悪い時期を繰り返す不安定な漁況になりそうだ。

三陸海域への魚群南下が平年より遅れ、10月中旬に漁場を形成する見込み。常磐海域の漁期・漁場予測については、同機構は9月から始まる中短期予報を発表するとしている。

サンマの漁獲量は昨年、農水省の速報値で1977年以来最低の11万5300トに落ち込んだ。主力の獲り網船は8年以降最低の11万2000ト。2010年以降は減少傾向をたどる。一方、韓国や台湾、中国などの漁獲が増え、日本の漁獲シェアは約3割となっている。



サイズ組成は前年同様、1尾28センチ以上の1歳魚が全体の85%を占める予想。重量や脂ののり具合は前年を上回ることが、担当者は「昨年の漁期前調査では100センチ以上の魚は120センチ以上は50%のみだった。今年は120センチ以上が75%で、平均並みの脂ののりが期待できる」と説明した。

みなと新聞 8月1日

過去10年の秋サケ来遊予想と実績 (単位=万尾)

年	予想	実績
平成28年	3,902	?
26年	4,060	3,508
24年	3,853	3,910
22年	4,996	3,975
20年	5,063	3,872
18年	5,224	5,368

※18-21年は道立水産孵化場、22年以降は道立総合研究機構が、内水試算の数字

平成28年海区別秋サケ来遊予想 (単位=千尾)

海区	東部	中部	西部	北部	南部	東部	西部	日高	胆振	釧路	道南	道北	道中	道南	合計
オホーツク	9,893	4,560	3,398	5,993	1,715	7,709	1,298	2,482	1,606	996	1,038	752	1,084	367	39,015
根室	125.9%	106.1%	85.7%	112.2%	80.6%	103.2%	89.1%	98.5%	99.6%	98.5%	130.1%	77.5%	111.4%	83.2%	108.0%
えりも以東	17,849	8,935	5,133	7,709	3,835	5,133	1,298	2,482	1,606	996	1,038	752	1,084	367	39,015
えりも以西	103.2%	110.9%	104.4%	98.5%	99.6%	98.5%	130.1%	103.1%	92.4%	83.2%	92.4%	92.4%	92.4%	92.4%	92.4%
日本海	752	1,084	367	2,203	92.4%	2,203	92.4%	2,203	92.4%	2,203	92.4%	2,203	92.4%	2,203	92.4%
合計	39,015	108.0%	39,015	108.0%	39,015	108.0%	39,015	108.0%	39,015	108.0%	39,015	108.0%	39,015	108.0%	108.0%

日刊水産経済新聞 8月18日

中国の購買力が突出

「景気減速にもかかわらず、日本も欧州も中国の購買力に付いていけない。最近ではサンマなどの消費も増えてきた」

中国の「爆食」も続いているのか、という。日本も欧州も中国の購買力に付いていけない。最近ではサンマなどの消費も増えてきた。

「80年代まで水産物の消費は日本が中心だった。ところが、世界の需要が人口増加や新興国の経済発展で拡大し始めた。天然資源に頼る水産物の供給には限界があり、相場は上昇した。米国の富裕層や新興国で台頭した中間層は健康への意識が高く、高い値段を出しても水産物を食べる」

「一方、日本は少子高齢化に加え、単身世帯などの増加で料理の手間がかかる魚の消費が落ちている。パル経済の崩壊以降、所得も減少し、高くて水産物を買って世界の趨勢に追い付かなくなった」

「国内でも食品の値上げが目立ちました。14年度から15年度にかけては当社製品も含め、値上げが浸透してきた。ただ、消費者には将来の生活不安が根強く、生活防衛意識は高い。ここに至ると円高で再び流通企業から値下げ圧力が高まる懸念はある」

「水産大手はやはり成長市場に経営の軸足を移すのですか」

「当社の売上高に占める海外市場の比率はここ5、6年で2倍以上の約18%に上昇した。だが、日本人にもう一度、水産物の良さを認識してもらえようという商品開発も重要だ。世界の人が和食の魅力にひかれていくのに、日本人の食生活で「魚離れ」が進む現状は残念だ。世界の水産物消費をおさえ、日本市場に供給できる体制を維持したい」

堅調な水産物需要

日本経済新聞 8月22日 経済観測

新興国の経済発展を背景に、水産物の消費は世界で拡大してきた。中国や欧州の景気不安で需要に鈍化はあるのか。マルハニチロの伊藤滋社長に聞いた。

水産物の需要に変化はありませんか。

「欧州では北米産スケンウタラやエビの消費が昨年後半から落ちてきている。ドイツが輸入するベトナム産バス(ナマズの一種)の荷動きも鈍化した。海外から水産物を買うようになったナイジェリアなどの資源国にも一時的な勢いはない。ただ、米国や中国、東南アジアなどの需要は強い。世界全体でみれば堅調だ」

買い負ける日本

中国の「爆食」も続いているのか、という。日本も欧州も中国の購買力に付いていけない。最近ではサンマなどの消費も増えてきた。

「80年代まで水産物の消費は日本が中心だった。ところが、世界の需要が人口増加や新興国の経済発展で拡大し始めた。天然資源に頼る水産物の供給には限界があり、相場は上昇した。米国の富裕層や新興国で台頭した中間層は健康への意識が高く、高い値段を出しても水産物を食べる」

「一方、日本は少子高齢化に加え、単身世帯などの増加で料理の手間がかかる魚の消費が落ちている。パル経済の崩壊以降、所得も減少し、高くて水産物を買って世界の趨勢に追い付かなくなった」

商口開発に注力

「国内でも食品の値上げが目立ちました。14年度から15年度にかけては当社製品も含め、値上げが浸透してきた。ただ、消費者には将来の生活不安が根強く、生活防衛意識は高い。ここに至ると円高で再び流通企業から値下げ圧力が高まる懸念はある」

「水産大手はやはり成長市場に経営の軸足を移すのですか」

「当社の売上高に占める海外市場の比率はここ5、6年で2倍以上の約18%に上昇した。だが、日本人にもう一度、水産物の良さを認識してもらえようという商品開発も重要だ。世界の人が和食の魅力にひかれていくのに、日本人の食生活で「魚離れ」が進む現状は残念だ。世界の水産物消費をおさえ、日本市場に供給できる体制を維持したい」

マルハニチロ社長 伊藤 滋氏

いとう・しげる 主力の水産事業を歩み、スペイン駐在など海外経験も。66歳。